

電気のふるさと

電源地域ニュース

● 特集 電源地域のサクセスストーリー

平成16年度 (財)電源地域振興センター マーケティング調査事業活用事例
行政が住民グループの自立をバックアップ

女性の視点と行動力で地域の幸せづくり

長野県 上田市丸子地域



電気のふるさと

電源地域ニュース

C O N T E N T S



長野県 上田市丸子地域「鹿教湯温泉五台橋」

● Key Person..... 2

愛媛県 伊方町 町長
山下 和彦

● 特集 電源地域のサクセスストーリー..... 4

平成16年度 (財)電源地域振興センター マーケティング調査事業活用事例
行政が住民グループの自立をバックアップ
女性の視点と行動力で地域の幸せづくり
長野県 上田市丸子地域

● 電源地域の政策トピックス..... 10

平成19年度 電源立地対策に係る政府予算案の概要
経済産業省

● センター掲示板..... 12

- 「電気のふるさと 新じまん市」を幕張メッセで開催します!..... 12
- 平成18年度 電源立地促進功労者表彰が行われました..... 13
- 電源地域への企業誘致・立地促進を支援します..... 13
- 電気のふるさと 産品自慢..... 14
 - 石炭?ほろ苦さ漂う黒いダイヤ 島根県 浜田市
 - 話題になってます!「萩たまげなす」と「はなっこりー」 山口県 萩市
- Vol.6読者の声から..... 15
- 人事往来..... 15
- 読者プレゼント..... 15
- 編集後記..... 15

電源地域探訪 ~表紙のことは~

四国最西端の町、伊方町は長さ50kmという日本一細長い「佐田岬半島」に位置します。ドライバーに人気がある国道197号(通称:メロディーライン)は、美しいリアス式海岸と紺碧の海、澄みわたる空をどこまでも堪能することができます。

「岬アジ、岬サバ」をはじめとする魚介類、また、温暖なこの地域の段々畑で栽培される柑橘類は、地元関係者の懸命な販路拡大活動によって、全国にファンを作り続けています。

間もなく合併2周年を迎える伊方町では、豊かな地域資源をもう一度見つめなおし、多くの方に訪れてもらえる活気あるまちづくりを進めています。

表紙:伊方発電所(四国電力) 総出力:202.2万kW

営業運転開始:昭和52年9月(1号機)、昭和57年3月(2号機)、平成6年12月(3号機)

Key Person



愛媛県 伊方町 町長
山下 和彦

おらんとこにはな、富士山より高い山があるがよ。十三里もあつてな風でこけたらいけんけん、横に寝かせてあるがよ……。愛媛県の西南部には、このようなおもしろおかしい昔話(トッポ話)が沢山あります。

この横に寝かせてある山は、佐田岬半島と呼ばれ、四国の西端から九州に向かって象の鼻のように突き出しています。半島の先端部から三崎町、瀬戸町、伊方町という三つの町があり、平成十七年四月一日に合併し、新「伊方町」が誕生しました。合併しても、一万三千人足らずの小さな町ですが、豊かな自然の中で、町民一人ひとりが心豊かに暮らすことのできる「よるこびの風薫るまち」を目指しています。

私たちの町は、四国と九州を結ぶ西の玄関口という要衝にあり、大分県とは海を隔てて、わずかに十数キロメートルの距離にあります。潮流渦巻く、この豊予海峡を橋かトンネルで結び、紀淡海峡から伊勢湾に通ずる第二国土軸構想という壮大なロマンもあります。

古くはイワシやサバなどの沿岸漁業で栄え、大正から昭和にかけては

良質の銅鉱石を産出。畜牛や養蚕の産地としても名を馳せ、戦後は柑橘栽培が急速に進み、今では耕地の九十パーセント以上が柑橘園となっています。温州みかんに始まり、伊予柑やデコポン、清美タンゴールなどの晩柑類に移り、温室みかんへと続く周年栽培で、産地間競争に活路を見出し出そうとしています。

また、リアス式の沿岸海域では伊勢エビ、アワビ、サザエ、ウニなどが豊富で、こだわり漁師の一本づりではアジ、サバ、タイ、ハマチの大半を鮮魚として集出荷。中でも「岬アジ、岬サバ」は高級ブランドとして定着し、近年、チリメン漁やアワビ養殖も盛んになっています。ほかにも、古い歴史と伝統を誇る伊方杜氏の地酒もあります。

こうした多種多様な産業、豊かな自然、伝統文化、地域の人々といった財産等々、町のあらゆる宝を融合させた「触れ合い、楽しみ、体験する」ツーリズムを振興させることで、町の活性化につなげたいと思っています。

伊方町のもう一つの顔は、四国で唯一の原子力発電所があることです。

昭和四十四年に町が誘致に乗り出し、昭和五十二年に一号機、昭和五十七年に二号機、平成六年に三号機が営業運転を開始。今では、四国の電気の約四割をまかなう重要な役割を果たしています。また、昨年十月にはプルサーマル計画の受け入れを表明。国策に協力することを基本に、安全安心を前提に、国の制度を有効活用し、これからの新しい町づくりを進めて参ります。

町の舵取り役として、やっと二年が経過しようとしています。私の信条であります開かれた行政運営による新町の一体感の醸成を、最重要課題とし、伊方町に生まれ、暮らしてよかったと実感できる町づくりの実現に努めます。

今年度は、町の南北を縦断する町道の開通、温泉温浴施設の整備にも着手しました。今後は、防災通信施設の二層の充実、集落間を結ぶ町道の改修、福祉対策等々、一歩一歩着実に推進して参ります。

電源地域の皆さんの町づくりに学び、活気あるふる里づくりに、職員と共に汗して参りたいと思っています。

平成十六年度(財)電源地域振興センターマーケティング調査事業活用事例

行政が住民グループの自立をバックアップ

女性の視点と行動力で地域の幸せづくり

長野県上田市丸子地域(旧丸子町)は、三つの温泉地を擁する丸子温泉郷が古くから湯治場として親しまれてきたまちです。しかし近年では観光客が減り続け、町全体でも人口の流出や農家の高齢化が大きな問題となってきました。そこで立ち上がったのが、地元の旅館や農家の女性グループです。情熱に満ちた両グループは、行政の支援やアドバイスを受けながら「癒し」や「健康」をテーマにユニークな活動を展開しています。そして、女性グループの積極的な活動を行政がしっかりとバックアップ。今回は、温泉観光業と地元農業との連携で地域活性化に取り組んでいる上田市丸子地域にスポットを当てました。



お問い合わせ先
上田市丸子地域自治センター 地域振興課
TEL 0268-42-1011
http://www.city.ueda.nagano.jp/hp/mk/index.html

三つの温泉地を抱える古くからの湯治場

長野県の東部に位置する上田市丸子地域(旧丸子町)は、平成十八年三月に近隣の旧上田市・旧真田町、旧武石村と合併して新生・上田市の一員となりました。東に浅間山、南に蓼科山を望み、西の端は美ヶ原高原へ連なるこの地域には、約二十四千人が暮らしています。約百六平方キロメートルある総面積の七十パーセントを山林が占めますが、丸子地域の中央を東西に流れる依田川沿いには住宅や工場が建ち、農地が広がっています。年間の降水量は九百ミリと少なく、空気は乾燥して冷涼な気候です。地域には、東京電力株式会社の塩川水力発電所(八千百

ワット)があり、地域の電力供給に貢献しています。かつては製糸業が盛んで「糸の町・丸子」として知られていましたが、戦後は化学繊維などの普及で衰退。近年では自然環境を生かした精密機械、電機、食品などの工場が進出しています。農業においては耕地面積が少なく、ほとんどが兼業農家です。県花であるりんどうや薬用人参の生産でも知られ、リンゴやブドウの生産地でもあります。

西端の美ヶ原高原の裾には鹿教湯・大塩・霊泉寺の三つの温泉地があり、古くから湯治場として多くの人が訪れていました。この丸子温泉郷は環境省から「国民保養温泉地」と「国民保健温泉地」の指定を受けて

観光客の減少と農家の高齢化に危機感

鹿教湯温泉には、医学的リハビリを中心に取り組んでいる「JA長野厚生連鹿教湯三才山リハビリテーションセンター鹿教湯病院」と、厚生労働省運動療法施設の指定を受けている「クアハウスかけゆ」があります。これらを利用した温泉療養事業で、多い時には年間七十六万人というお客さんがやってくるなど、いわば何もみなくとも丸子温泉郷は賑わっていました。しかしバブル経済の崩壊

以後、長引く景気の低迷やお客さんの嗜好の多様化などの影響で、観光客は年々減少してきました。「温泉保養で訪れるお客さんをあてにして、新規の観光客を増やす工夫をしてみなかつたのが大きな原因だと思っています。それに保養を目的としたリピーターが高齢化したのも原因のひとつ。観光客数はピーク時の六割くらいまで落ち込んでいます」と語るのは、上田市丸子地域自治センター長の小林健一さん。小林さんは旧丸子町役場では企画課長でした。「問題は観光業だけではありません。丸子では年々農家の数が減り、農業専従者の高齢化も進んでいます。若い人の専門農家は少なく、ほとんどが定年

後に専業となった。定年帰農です。このままでは荒廃農地や空き家もますます増える一方。また若い人たちも減少し、平成二十三年度には、ある小学校では児童が各クラス十人以下になると予測されています」と、小林さんは危機感を募らせていました。

合併話がマーケティング調査事業依頼のきっかけ

そのような状況の中で、旧丸子町では上田市・真田町・武石村との合併の話が進んでいました。小林さんは、まさにこの市町村合併に携わる担当者でした。「合併すれば丸子は新市の一部になり、中心ではなくなってしまう。今やらなければ、丸子の活性化は進まないと思



上田市丸子地域自治センターセンター長 小林 健一さん

いました。将来は財政のひっ迫が予想されるため、町が新たに補助金を出すのは難しい。その際に、頭に浮かんだのが活動費の補助が受けられる(財)電源地域振興センターのマーケティング調査事業でした。

役場の中でマーケティング調査事業を利用することに積極的だったのは、観光課と農林課でした。しかし、観光課は温泉客の増加対策を求め、農林課は農業の活性化策を求めたため、小林さんは両者の接点となる課題を見出し、活性化させるにはどうしたらよいかを模索しました。そして、何度も中部経済産業局と相談しながら、提出する書類の内容をまとめ、採択に結びつけたのです。

観光と農業の融合のため「癒し」と「健康」をテーマに

平成十六年、旧丸子町で「観光と農業の融合のため「癒し」と「健康」をテーマに」調査の中では丸子温泉郷の観光客アンケートによって得られた声をもとに、様々な観点か



遊休荒廃農地を有効活用した丸子陣場地区ワイン用ぶどう園地「マリコヴィンヤード」毎年秋には収穫祭が行われ、世界最高品質のワイン造りを目指す

ら検討が重ねられました。その結果、観光業が提供する温泉地のくつろぎ効果やもてなしの心、また、農業が提供する地元の新鮮で栄養豊かな食材。これらを結んで、「癒し」と「健康」という共通テーマを掲げました。そして、新規商品として、地元の新鮮な食材を使った「丸子自慢料理」を開発し、これを直販所や旅館などで活用していくということになりました。

開発にあたっては、薬膳料理研究家の新倉久美子氏を先生として招聘し、アドバイスや講評をいただきながら、試作・試食を繰り返しました。また、観光客アンケートでニーズの高かった「森林浴」「里山歩き・ト

旅館や農家の女性たちが地域の活性化に立ち上がる

女性も家から外に出て何か始めてみよう

町の観光業を代表して「ワーキンググループ」に参加したのが「内村つねの会」です。この会は平成十五年十月に、丸子温泉郷とその周辺のホテル・旅館・商店、農家などの女性たち十五人ほどで結成され、現在は二十人以上のメンバーがいます。温泉客が年々減っていくのを何とかしなければと切実に感じていたのは、実は男性たちよりも会計を担当していた女性たちでした。そんな中、平成十四年に鹿教湯温泉の旅館のある女将さんが思いきった行動を起こしました。「東京・巣鴨のとげぬき地蔵に行き、

女将さんがたった一人でピラを配ったんです。温泉保養のお客さんはお年寄りだと考えたからです。この行動自体は残念ながら即効を生み出すことはありませんでしたが、その熱意と行動力には感心しました。私たち女性ができることを、何かやってみようということになり、この会が結成されました」と当時を振り返るのは、「内村つねの会」会長の長岡和恵さん。内村は昔からの地名で、丸子温泉郷は、内村温泉郷とも呼ばれていました。そこに住む娘(元気な女性)たちの集まりなので、「内村つねの会」と長岡さんが名付けました。「私たち女性はずっと裏方に徹していましたが、男性たちに任せていても会合ばかりやって、ちつとも前進しない。このままではいけないと思い、仕事を終えた夜八時から、町の公民館やメンバーの旅館などに集まって

真剣に話し合いました。そしてまずは自分たちでお金を出し合っ、旅館やお店の情報を入れた丸子温泉郷のマップを作ったのです。しかし、夜に奥さんが外出することに「ご主人は快く思わず、その理解を得ることに一苦労だったそうです。」

女性ならではの視点でユニークな活動を展開

活動を始めた「内村っ娘の会」にとって、翌年の「ワーキンググループ」への参加は大きな転機となりました。会の顧問である斎藤繁子さんはこう振り返ります。

「ワーキンググループで改めて気づいたのは、町全体が衰退の危機を迎えているということ。単に旅館や店がお客様を呼ぶ工夫を考えるだけでなく、観光の原点を見直して、地域のことを考えなければいけない」と思いました。その意味で



内村っ娘の会 斎藤 繁子さん

も、丸子自慢料理の開発は、今まであまり交流のなかった農家の方たちと協力し合うことで、お互いの理解が深まり、とても有意義でした。また、薬膳料理研究家の新倉先生にお会いすることができたのも大きな収穫です。先生にはその後もいろいろと協力いただき、全国の様々な情報を教えていただいています。マーカーティング調査事業を通じて、地域ぐるみでの取り組みが必要だと感じた「内村っ娘の会」は、その後、長野県が行っている市町村や公共的団体等への支援制度「モンスズ支援金」(※1)を活用。地元農産物を使った「丸子温泉郷 旬の健康食レシピ」を紹介するホームページや小冊子を作成するなど、広い視野を持って情報発信しています。「新企画の『名所マップ』では、従来の名所にとらわれず地元



内村っ娘の会 長岡 和恵さん

の人おすすめの場所を取材して掲載し、あえて旅館や店の情報は一切入れていません。さらに現在は、丸子温泉郷の『人マップ』を企画中です。ここにこんな人が住んでいるとすぐ分かる。また、鹿教湯温泉の通り沿いの軒下で、温泉客に気軽に立ち寄ってもらえるお茶会席、お話しやしよを旅行会社とのタイアップで開催しています。地元の家料理を無料で提供し、お客さんと地元の人との交流を深めようと考えました」と斎藤さんは熱く語ってくれました。 ※1 長野県が県内の自律する市町村を支援するため「信州ルネッサン革命」推進事業(一律の基準による画一的な支援ではなく、市町村や公共的団体等を重点的に支援するもの)として平成十七年に創設した制度。

観光客を呼ぶにはまず地域が幸せであること

これらの活動は、新聞や地方紙、地元ケーブルテレビなどのマスコミに取り上げられ、多くの取材が来るようになりました。外部からの評価は、内部のメンバーたちの意欲を刺激するとともに、それまでなかなか理解が得られなかった男性たちの気持ちにも変化を与えま

循環型農業をめざす 女性たちのグループ

一方、町の農業を代表して「ワーキンググループ」に参加したのが「下丸子ステビアの会」です。この会の前身は、農家の主婦たち約七十人が集まって結成した婦人会。平成十三年に設置された下丸子地区の農産物直売所などで、有機栽培したキュウリやトマト、ピーマンなどの野菜を販売していました。

「私たちは、環境にやさしい循環型農業を取り入れていきます。米ぬかにEM(有用微生物)と糖蜜を混合して発酵させたものを、家庭から出た生ごみに加えて堆肥を作り、それを利用して作物を栽培しています」と語るのには「下丸子ステビアの会」会長の小林節子さん。同会は、丸子町農産物直売加工センター「あさつゆ」が平成十六年六月に新設されるのに先駆けて、平成十五年五月に婦人会の中から十八人が参加して結成されました。

「冬期には、店頭に並ぶ農産物が少なくなり、そこで商品確保のために農産物を原料にした加工商品を作っていました。



下丸子ステビアの会 小林 節子さん

という要望から、加工研究グループとして発足したのが「下丸子ステビアの会」でした。その名前は加工原料に天然甘味料ステビアを栽培して使用していることから付けました」と小林さん。とはいえ、メンバーはみんな一般の主婦で、加工商品を創作する料理の専門家はいません。下丸子地区にあった空き家を改装した加工場で、試行錯誤を重ねてようやく商品を作り上げたのです。

手作りの農産物加工品が「あさつゆ」で大評判に

こうして完成した菓子製品が大豆で作った「豆菓子」、小麦粉やきびごまなどで作った「のら菓子(かりんとう)です。同会では他に、おこわ、薄焼き(韓国の子デミ風のもの)といった商品も「あさつゆ」で販売しています。「どの商品も好評をいただい



下丸子ステビアの会 依田 貴美子さん

ています。『のら菓子』は「信州味のコンクール商品加工の部」に出品して優秀賞を受賞しました。二種類のお菓子は、明治神宮の銀杏祭りなど東京で行われるイベントをはじめ、各地から問い合わせが来ています」と、同じく「下丸子ステビアの会」の依田貴美子さんは話してくれました。「下丸子ステビアの会」の女性たちの活動も、「内村っ娘の会」のように当初はご主人たちから出しゃばり過ぎるようになってしまうといわれています。しかし「あさつゆ」での順調な売れ行きに、男性たちの意識も変わってきたということです。

「加工商品の原料は、調味料などを除いてほとんどが丸子産。会のメンバーのご主人が作っています。男性はとにかく女性に口を出されるのは嫌ですが、頼まれるのはうれしいみたいです。この原料はこのくら

丸子温泉郷について

丸子温泉郷にある三つの温泉は、それぞれ神秘的な伝説を持っています。国民保養温泉地として環境省から指定されている、全国でも数少ない温泉です。

●鹿教湯温泉

文殊菩薩に導かれた獵師が、矢で受けた傷を湯に入って治す鹿を見つけたことから、「鹿が教えた湯」としてこの名がつけられたといわれています。

●大塩温泉

戦国時代の天文年間に発見。武田信玄が川中島の合戦で負傷した兵の治療・湯治に利用したと伝えられ、「信玄の隠し湯」と呼ばれています。内村川南岸の田園地帯で湯煙をあげる、閑静な温泉です。

●霊泉寺温泉

古くに開けた湯で、謡曲「紅葉狩」に登場する平維茂が鬼女を退治した時に受けた傷をここで癒し、寺を建てて霊泉寺と名付けたと伝えられています。昔ながらの家族的な宿があります。



した。「出る釘は打たれる」といいますが、出過ぎた釘は打たれない(笑)。ようやく男性たちも、私たちの活動を認めてくれるようになりました。お客様は、そこに住んでいる人たちがいきいきと幸せな顔をしていないと観光地には来てくれません。地域が幸せだと、それを魅力に感じてまた来てくれるものだと思います。まず私たちが元気で

明るくなければいけません」と話す長岡さん。また斎藤さんも「やはり地域は運命共同体。地域を幸せにするには、地元に住む者が昔からの支え合いの心を再現することが大切ですね。農家の人も観光業に携わる人も、それぞれに培ってきたノウハウを持っています。この二つが協力すれば、今までにない大きな力になると思います」と口を揃えます。

農産物直売加工センター「あさつゆ」

「あさつゆ」は、丸子地域の農家が作った新鮮な作物や、加工食品、民芸品などを販売している直売所です。地域の運営組合員による経営で、延べ210名の生産者(農家)が作物などを提供。全て生産者が明記されており、生産者と消費者とのかけ橋となっています。店には毎日採れたての野菜や果物が並び、隣接の食堂では、地元産小麦を使った手打ちうどんを提供しています。

平成16年6月に誕生して以来、年々売り上げを伸ばしており、丸子地域の地産地消の大きな拠点です。

【お問い合わせ先】 あさつゆ TEL:0268-41-1062



い確保したいと注文すると、男性たちは一生懸命に頑張つて供給してくれます。そして、女性たちが加工商品として販売する。まさに地産地消そのものです。会のメンバーも自分たちの品物が売れることに手ごたえと生きがいを感じて張りきっています。

農業だけでなく地域の活性化への関心も高まる

参加したことで、「下丸子ステビアの会」も大きな影響を受けたいと思います。小林さんは、「内村っ娘の会」の積極的な姿勢には、大きな刺激を受けました。私たちの会のメンバーは高齢者が多いので、無理をしないで作るといのが基本ですが、それでも可能な限り新鮮で安全な食材を提供していこうと考えています。「内村っ娘の会」でも、私たちの活動を新聞や広報紙などで見て刺激を受けてお



られるとのこと。これからもお互いに励まし合いながら地域の幸せづくりを進めていきたいですね」と今後の抱負を語ります。また依田さんは「ワーキンググループに参加して、農業だけでなく私たちにも地域のために何かできるのではないかと考えました。現在、空き家を借りて「あさつゆ」に出す商品の加工場に行っていますが、その空いている部分をお年寄りが集まって楽しく過ごせる交流スペースとして利用しています。そういったアイデアを、これからも実現させていきたいと思っています」と目を細めました。

住民グループの熱意に行政も精一杯応えていきたい

行政の立場からマーケティング調査事業における事務局としての支援のほか、県の各種補助金制度への申請など、住



上田市丸子地域自治センター 地域振興課 主事 澤山 みどりさん

民グループを支えてきたのが上田市丸子地域自治センターです。「それまではご自分の分野や、住む地域のことだけにとらわれがちだった住民グループの方たちが、マーケティング調査事業以降はもつと広く問題意識を持つようになり、熱意が高まってきたように感じます」と話すのは、同センター地域振興課の澤山みどりさん。澤山さんは、住民グループと接する窓口の業務を受け持ち、支援金や補助金の申請について相談を受けています。「行政への書類を作成するのが苦手という方は多いと思います。特にソフト面に関する活動は、その目的や効果を明記し、イメージを説明しなければならぬため、難しいですね。できるだけ分かりやすくアドバイスして、お力になれるよう努めています。最近では住民グループが積極的になり、自治センターとのつながりや連携も強くなってきたと言います。「行政へのアプローチの仕方について、『内村つ娘の会』と『下丸子ステビアの会』の皆さんは、マーケティング調査事業に参

膳料理を完成させ、小冊子にまとめました。一部の旅館では、すでにそのメニューをお客様への料理に採用し、好評を得ています。お客様の反応を見ながら、今後はこの薬膳料理をどのように活用していくか、さらなる検討が必要ですが、

成果と課題3 お年寄りのやりがい・生きがいの創成

丸子地域の多くは高齢者が農業を担っています。主に野菜などは自家用に栽培していましたが、「自分でつくったものを買ってもらえる喜び」「販売してお金が入る」という実感から、「あさつゆ」への出荷が増え、現在は観光業との連携に結ぶところまできました。「ステビアの会」は、丸子地域の住民提案型事業補助金を利用して、空き家を利用した高齢者のためのスペース「ステビア憩いの家」を開設しています。月一回、引きこもりがちなお年寄りを集めて健康相談や折り紙・押し花づくりなどをを行うもので、手作りのお菓子を出してふれあいの時間を過ごします。「帰宅して出

加したことがとても役に立つたとおっしゃっていました。この二つのグループの他にも、地域の活性化に取り組みされている方々はいらっしゃいます。その思いにお応えできるよう、私

まだスタート地点に立ったばかり 地域の継続的な連携が必要

平成十六年度に実施された(財)電源地域振興センターのマーケティング調査事業をきっかけとして、丸子地域では次のような成果が生まれ、課題が見つかりました。

成果と課題1 観光業と農業の交流で連携が生まれる

「ワーキンググループ」での活動がきっかけとなり、平成十七年に「内村つ娘の会」主催で数回開かれた「いなか食」の料理づくりと試食のイベント(「コモンズ支援金」を利用)に、「下丸子ステビアの会」が参加するなどの交流が生まれました。また丸子温泉郷の数の旅館が、農産物直売加工センター「あさつゆ」で販売される地元野菜や果物を購入して料

地域のみんなが助け合い 笑顔が輝く丸子に

「マーケティング調査事業は、合併して上田市の一部となった丸子地域が、これからのような方向性で進んで行くのかを考えるいいきっかけになりました。『癒し』と『健康』というテーマが見つかり、観光業と農業のコラボレーションという道筋もできてきました。しかし実際にそれをどう展開していくかが最も大切。丸子地域の活性化は、やつとスタート地点に立ったところだと考えています」と、丸子地域自治センター長の小林さんは自らに言い聞かせます。

さらに、「丸子地域には『内村つ娘の会』や『ステビアの会』だけでなく、他にも様々な分野の住民グループやボランティア組織があります。それぞれの趣旨や特色を把握して、スムーズかつ効果的に活動できるようにサポートしていくのが行政側の役割です。そのためには、どういったグループがどこにあって、どんな活動をしているのかを常に把握しておかなければなりません。丸子地域では公的な地域活性化協議会のような

たち行政側もいろいろな支援制度のメニューや、住民の皆さんと一緒に良い地域を目指すため、さらにフットワークを軽くし、頑張っていかなければならないと考えています。」

成果と課題2 丸子自慢料理の開発と実用化

「ワーキンググループ」活動の中で、薬膳料理研究家の新倉先生の指導・監修により地元旬の食材を使った「丸子自慢料理」が開発されました。試作品として秋の薬膳料理が創作されましたが、その後「内村つ娘の会」がそれを受け継ぎ、新倉先生の協力により「ふるさと薬膳」として四季の薬

なものには設けていませんが、住民グループの個々の活動が地域の人たちに理解されていけばいいと考えています。カタチではなく、何をやるかが肝心です」と小林さんは強調します。

丸子地域自治センターでは、リハビリ施設を持つ病院やケアハウスとの連携による新たな温泉客の誘致メニューづくりや「信州国際音楽村」を核とした生涯学習活動の拠点づくり、加工用ぶどう畑の造成を端とする新たな産産ブランドづくりなど、地域振興を目的とした多くのアイデアを持っています。

「例えば農作物の加工品づくりで、人手が足りずに量産できないのなら、地域の食品工場とのタイアップも可能。行政や住民グループ同士の連携で、可能性はどんどん膨らみます。途中であきらめることなく、地域のみんなが助け合いながら、たとえ地味でも継続的に活動を行っていけば道は開けるはずですよ」と小林さん。

地域おこし活動のコラボレーションが、これからさらにどんな素晴らしいハーモニーを奏でてくれるのか、ますます楽しみです。みな上田市丸子地域です。



丸子自慢料理「ふるさと薬膳」

美ヶ原の野草の80%は薬草であると言われています。その裾にある丸子温泉郷では、昔から地元で採れる新鮮な旬の食材によって健康的な食文化が育まれてきました。日本の食養生の基本として「身土不二」という言葉があり、これには心身と風土とは一体であるという意味が込められています。つまりその季節に採れる旬のもの食べることが、人の健康に最も良いということです。また、中国では薬と食べ物はその源が同じであるという「薬食同源」という考え方があり、長い歴史の中で薬膳料理が生まれています。丸子自慢料理「ふるさと薬膳」はこの二つの理念を基に開発されました。

鹿教湯温泉の見どころ「氷灯ろう夢祈願」

「氷灯ろう夢祈願」は、毎冬の十二月から二月にかけて鹿教湯温泉・五台橋周辺で行われています。道路両側に並べられた氷製の手作り灯ろうに火を灯し、神秘的で風情ある夜の温泉街を楽しみながら歩くイベントです。毎日夕方に、たいまつを使って「夢の成就を祈願しながら」一つ一つ点火。誰もが点火に参加でき、訪れた温泉客の楽しみとなっています。イベントには、人とふれあい、自然とふれあいながら、充実したひとときを過ごしてほしいという願いが込められています。

【お問い合わせ先】 鹿教湯温泉観光協会事務局 TEL:0268-44-2331



平成十九年度電源立地対策に係る政府予算案の概要

経済産業省

I ポイント

平成十九年度予算においては、
 ①電源立地対策に係る経済産業省分の予算として千六百八十七億円（前年度比六十二億円増）を計上し、そのうち、政策的経費として千五百七十七億円（前年度比八十八億円増）を確保するとともに、
 ②立地の進展を踏まえ、周辺地域整備資金を百七十一億円（前年度比九十億円増）取り崩すなどの措置を講じます。

※電源開発促進税収（電源立地対策分）及び剰余金と歳出との差額である百二十三億円については、一般会計に留保（必要な財政需要が生じた年度には、電源立地対策に充てるための繰り入れを行う）。
 ※なお、平成十八年度予算において、十八年度特例公債法に基づき、二百九十七億円を一般会計に繰り入れることとしている。

II 歳出予算の概要

1. 原子力発電施設等の地域との共生を図る地域振興

原子力発電所、核燃料サイクル施設の立地を積極的に推進するとともに、高レベル放射性廃棄物の最終処分候補地の選定を促進するため、地域振興に係る施策を強化します。

①電源立地地域対策交付金
 千五百四十四億円（九百七十億円）
 原子力発電所や核燃料サイクル施設の立地の進展に伴う増額を確保します。

②初期対策交付金相当部分の最終処分施設候補地への交付額の増額（電源立地地域対策交付金の内数）
 高レベル放射性廃棄物の最終処分候補地の選定を促進するための支援の強化として、文

献調査段階の電源立地地域対策交付金の交付額を単年度あたり十億円（総額二十億円）に拡充します。

③原子力関係人材育成事業
 ○・九億円 ○・六億円
 原子力発電施設におけるメンテナンスを担う現場の技能者の質的な向上や技能維持を図るため、立地地域の教育機関や研修施設などのポテンシャルを生かしつつ、立地地域における個別企業の枠を超えた研修制度の確立のための支援を行います。

※核燃料サイクル交付金と原子力発電施設立地地域共生交付金の自治体間の配分については、「所在市町村及び隣接市町村の行政運営に資するものとする」よう規定した。

※核燃料サイクル交付金については、プルサーマルへの平成十八年度内の事前了解を交付要件としていた

が、平成十九年度内までに期間を延長する。
 ※核燃料サイクル交付金については、既存の発電所においてプルサーマルの進展に対応するとともに、核燃料サイクル交付金の対象に新設の原子炉におけるプルサーマルを追加する。

2. 原子力安全・防災・核物質防護対策の確実な推進

①原子力安全確保対策の拡充等
 原子力安全を確保するための対策に引き続き取り組むため、高経年化対策としての産学官の連携による技術情報基盤整備や安全研究、耐震安全性に係る安全研究等を推進します。

また、我が国として原子力安全研究の技術的基盤を確保するため、国内材料試験炉を活用した照射設備の拡充を進めます。

・高経年化対策強化基盤整備事業
 十四億円（八億円）
 ・原子力発電施設等の耐震性評価技術に関する試験及び調査
 十四億円（十四億円）
 ・軽水炉燃料材料詳細健全性調査
 七億円（〇・五億円）

②原子力防災・核物質防護対策の推進
 原子力発電施設等の防災対策に万全を期すため、防災資機材の整備、防災訓練等に対する支援や、情報通信設備の高度化を進めた「統合原子力防災ネットワーク（仮称）」の構築等、防災基盤の強化を引き続き進めます。また、原子力発電施設等へのテロ等の脅威に対する核物質防護対策の充実・強化に取り組みます。

・原子力発電施設等緊急時安全対策交付金
 三十二億円（二十六億円）
 ・原子力発電施設等緊急時対策技術等
 三十一億円（二十八億円）
 ・原子力発電施設等核物質防護対策委託費
 六億円（六億円）

※（ ）内は平成十八年度予算額

平成19年度電源立地対策政府予算案の概要

（単位：億円）

	平成19年度予算案	平成18年度予算額	増▲減
1. 電源地域振興策 ・電源立地地域対策交付金	1,289 (1,054)	1,197 (970)	92 (84)
2. 原子力安全・防災対策	264	265	▲1
3. その他	24	27	▲3
政策的経費計	1,577	1,489	88
周辺地域整備資金への積立	110	136	▲26
(累積額)	(1,120)	(1,180)	(▲61)
経済産業省計	1,687	1,625	62
文部科学省分	318	324	▲6
一般会計への繰入	—	297	—
電源立地対策予算合計	2,005	2,246	▲240

（注）合計は四捨五入の関係で一致しないことがあります。

「電気のあるさと新じまん市」を幕張メッセで開催します！

電源地域の特産品の販路や交流人口の拡大を図り、産業振興を支援することを目的として、(財)電源地域振興センターの主催により開催していた「電気のあるさと新じまん市」が、今年は装いも新たに「電気のあるさと 新じまん市」として、四月二十日(金)から二十二日(日)までの三日間、千葉市の幕張メッセで開催することとなりました。

今回の「電気のあるさと 新じまん市」は、北は北海道から南は沖縄県まで、約六十市町村が出展を予定しており、各市町村が誇るじまんの特産品が一堂に集まります。

また、今回の最大の特徴は、国内最大級の旅の総合見本市「旅フェア2007」(主催：旅フェア実行委員会)と共同での開催になることです。「食・工芸」と「旅」との融合による相乗効果で、電源地域への一層の深い理解と交流が期待されます。

会場内では、各地の特産品の展示即売や食べ物、飲み物をその場で味わえる実演販売、出展者自らが地域を紹介する「ミニステージ」、地域に伝わる工芸



「旅フェア」と連動した催しなど、見どころが満載です。

過去十六回にわたって行われた「電気のあるさと新じまん市」ですが、「もの」を求めて来場するお客さまだけでなく、お馴染みの出展者との再会を楽しみに、いわば「ひと」を求めて来場するお客さまもたくさん見られました。そのような良さを受け継ぎつつも、従来とは少し違った一面を感じられるのが、新しくなった「電気のあるさと 新じまん市」です。

「じまん市大賞」などの他、直接指導する「旅先体感コーナー」、ノミネートされた特産品の中から専門家が優れた特産品を選定して表彰する

を地元の職人が来場者に直接指導する「旅先体感コーナー」、ノミネートされた特産品の中から専門家が優れた特産品を選定して表彰する

「新じまん市」を体感してみてください。皆様のご来場を心よりお待ちしております。

なお、ご入場には旅フェアの入場券(前売：四〇〇円、当日：五〇〇円 高校生以下無料)が必要となります。

2007.4.20~22

全国からじまんの逸品が大集合！

電気のあるさと新じまん市

主催：(財)電源地域振興センター



ぜひ、新しい試みの中にも温もりを残した「新じま



(注)本ページの写真は、すべて前回の「電気のあるさと新じまん市」で撮影されたものです。

平成十八年度 電源立地促進功労者表彰が行われました

平成十八年度電源立地促進功労者表彰が、平成十八年十一月十九日、内閣総理大臣官邸で行われました。この表彰制度は昭和五十六年の総合エネルギー対策推進閣僚会議の了承のもとに設けられ、電源立地に特に功労があった地方公共団体の長等を、内閣総理大臣および経済産業大臣が表彰するものです。

好義雄氏が受賞しました。表彰式では、安倍内閣総理大臣が三氏の長年にわたる電源立地に対する功績に敬意を表するとともに、立地地域への謝辞を述べました。また、これを受けて、青山前鹿島町長は、「電力の安定供給という国策のもと、鹿島町は終始一貫、国民の一人として原子力を理解し、協力することを基本に取り組みでまいりました。今後も原子力と共存共栄する町づくりに一層努力します」と受賞の喜びを語りました。

電源地域への 企業誘致・立地促進を支援します

(財)電源地域振興センターでは、電源地域における企業立地などを支援しています。

企業に対しては、各種イベントにおけるブース出展や企業説明会などを通じて電源地域における立地環境や支援制度情報を総合的に提供しています。また、立地意向のある企業に対しては直接訪問し、候補となる電源地域が用意する優遇措置や事業環境等のPR、工業団地情報の提供を行っています。

自治体に対しては、最新の企業立地意向や業界の動向を踏まえ、企業ニーズにあった立地環境整備を図っていた

ため、ダイレクトメール事業により企業の地方立地意向調査を実施し、分析・整理の上で情報提供を行っています。

さらに、特定市町村の要望に基づき、企業誘致の方策を検討する「企業導入実行計画調査」なども実施しています。

このほか、電源地域への誘致活動資料として「電源地域立地支援制度の概要」(電源地域マップ)を発行するとともに、企業の希望条件にあった団地の検索ができるサイトを当センターのホームページ上で公開し、広くPRしています。



電源地域立地支援制度の概要

当センターでは、地域特性を生かした提案型誘致を実現するため、今後とも各地域の皆さまと連携を密にし、相互情報交換を行っていきたくと考えています。

企業誘致支援などについてのお問い合わせ：ご相談はこちらまでご連絡ください。



安倍内閣総理大臣と甘利経済産業大臣を中心に記念撮影。黄色い胸章の方々が受賞者。前列左から西川夫妻、青山夫妻、三好氏



電源地域マップ

お問い合わせ先

(財)電源地域振興センター 企業誘致課

電話：03-5405-8116

e-mail: yuuchi@dengen.or.jp #6

お問い合わせ先

(財)電源地域振興センター 販売支援課

電話：03-5405-8119

e-mail: hanbai@dengen.or.jp #6

人事往来

●電源立地都道府県知事(平成18年11月～平成19年1月選挙分)

県名	氏名	当選月日
福島	佐藤 雄平	11月12日
沖縄	仲井眞 弘多	11月19日
和歌山	仁坂 吉伸	12月17日
愛媛	加戸 守行	1月21日
山梨	横内 正明	1月21日
宮崎	東国原 英夫	1月21日

●電源地域市町村首長(平成18年11月～平成19年1月選挙分)

市町村名	氏名	当選月日
妙高市(新潟)	入村 明	11月5日
上郡町(兵庫)	山本 暁	11月5日
三条市(新潟)	國定 勇人	11月12日
新潟市(新潟)	篠田 昭	11月12日
滝沢村(岩手)	柳村 典秀	11月12日
川俣町(福島)	古川 道郎	11月12日
伊根町(京都)	吉本 秀樹	11月14日
新発田市(新潟)	片山 吉忠	11月19日
韭崎市(山梨)	横内 公明	11月19日
長井市(山形)	内谷 重治	11月19日
金沢市(石川)	山出 保	11月19日
信濃町(長野)	松木 重博	11月19日
八街市(千葉)	長谷川 健一	11月26日
幌延町(北海道)	宮本 明	11月26日
阿久比町(愛知)	竹内 啓二	11月26日
奈井江町(北海道)	北 良治	11月28日
阿賀町(新潟)	神田 敏郎	12月3日
丸森町(宮城)	渡辺 政巳	12月12日
八千代市(千葉)	豊田 俊郎	12月17日
大網白里町(千葉)	堀内 慶三	12月17日
東庄町(千葉)	岩田 利雄	12月19日
福島町(北海道)	村田 駿	1月9日
恩納村(沖縄)	志喜屋 文康	1月9日
三沢市(青森)	鈴木 重令	1月14日
甲府市(山梨)	宮島 雅展	1月21日
深川市(北海道)	山下 貴史	1月21日
弥富市(愛知県)	服部 彰文	1月21日
赤穂市(兵庫)	豆田 正明	1月21日
垂水市(鹿児島)	水迫 順一	1月21日
余呉町(滋賀)	二矢 秀雄	1月21日
軽井沢町(長野)	佐藤 雅義	1月21日
倶知安町(北海道)	福島 世二	1月21日

【Vol.6読者の声から】
 ●地域の本当の価値を見出し、ブランド化へ向けて活動している十津川村を紹介した「電源地域のサクセスストーリー」を読んで、地域活性化にはそこに住む人々の地域に対するこだわりが基本にあるのだと思いました。
 (栃木県鹿沼市 男性)

●産品自慢に掲載されました三島町の編み組細工は、とても上品な仕上がりでしたので、一度手にとつて確かめてみたいです。
 (山口県長門市 女性)

●栃木県鹿沼市には日光東照宮の建立に携わった宮大工の子孫の方々が住んでいます。鹿沼秋祭りでは、「動く陽明門」と呼ばれる彫刻屋台が市街地を巡回し、そこでは宮大工の技術や絢爛豪華な装飾を見ることが出来ます。
 (栃木県鹿沼市 男性)

●NHKの大河ドラマ、「功名が辻」に登場した山内一豊とその妻千代とのゆかりが深い掛川城は、放映期間

中、大変な賑わいを見せました。市内では観好(観光)ボランティアが対応に追われ、皆さん汗だくでがんばりました。
 (静岡県掛川市 女性)

●石川県白山市には、堅豆腐、とちもち、山なめこなど、この山間地に嫁いで初めて味わった美味しいものがたくさんあります。どれも昔からずっと受け継がれてきた郷土食です。
 (石川県白山市 女性)

●徳島県小松島市は「フィッシュかつ」やちくわ、チリメンやまももが特産品です。詳しくは小松島市産業振興課までお問い合わせください。
 (徳島県小松島市 女性)

【編集後記】
 先日、ある自治体に赴き、複数の部署の方に集まっていただいて「どうすれば役場内で連携ができるか」を考えました。まずは「お互いにもっと話をしましょう」という方向性で着地したのですが、様々な人間関係やしがらみがうかがい知れ、一朝一夕にはいかないと感じました。行政はとかく「縦割り組織」と言われますが、本当に危機感を持つ自治体は、本音で議論することを恐れず、面倒がらず、はじめの一步を踏み出しています。この会は自らを戒める機会にもなりました。(K)

【読者プレゼント】
 今号の特集でご紹介しました長野県上田市「下丸子ステビアの会」の手づくり菓子「豆菓子」のら菓子のセット」を五名様にプレゼントいたします。とじ込みのアンケートハガキに本紙への意見、ご感想などをご記入の上、平成十九年四月二十日(消印有効まで)にお送りください。なお、当選の発表は発送をもって代えさせていただきます。

【「豆菓子」の菓子のセット」に関するお問い合わせ先】
 上田市丸子地域自治センター 地域振興課
 長野県上田市上丸子二六二番地
 TEL:0268-42-1011



電気のふるさと 産品自慢
 石炭? ほろ苦さ漂う黒いダイヤ

島根県 浜田市



島根県浜田市は、県の西部に位置し、切り立ったリアス式地形と砂丘海岸の織り成す海岸線は、優れた自然景観と天然の良港をもたらしており、古くから漁業のまちとして知られています。
 また、平成10年から中国電力株式会社の三隅発電所1号機(火力、出力100万kW)が運転を開始しています。この発電所は、海外から直送される石炭を燃料としており、環境に対する負荷を軽減するために石炭を効率的に利用する最新の技術「クリーンコール・テクノロジー」により運用されています。
 ご紹介する「黒いダイヤ」は、浜田市三隅町の和菓子店「光明堂」が、火力発電所にちなんだお土産の開発に取り組み、クリーンな発電所にふさわしい「クリーンコール(石炭)」の発想から生まれたお菓子です。

お問い合わせはこちら →
 ・浜田市役所 企画課 TEL:0855-22-2612
 ・光明堂 TEL:0855-32-0117

この商品の特徴は、ダイヤの原石を思わせるカタチと、噛めば「カリッ」とした歯ごたえとその後に続く柔らかな食感のゼリーです。黒い色は、イカスミを使用しているため、ほろ苦さが漂うコーヒー味となっています。
 平成12年度には、中国・四国商工会広域連携物産展で「グランプリ金賞」を受賞しました。発電所所在地ならではの一風変わったお菓子をご賞味されてはいかがでしょうか。



光明堂の「黒いダイヤ」
1箱 350円

電気のふるさと 産品自慢
 話題になってます!! 「萩たまげなす」と「はなっこりー」

山口県 萩市



山口県北部に位置する萩市は、比較的温暖な沿岸部から、盆地特有な気候を有する中山間部の変化に富んだ自然の中で、良質な米をはじめ、野菜、果樹、肉用牛などが生産されています。
 その中で今回ご紹介するのは、「萩たまげなす」と「はなっこりー」です。
 「萩たまげなす」は1本の重さがなんと500g以上ある大きななすび!見た目からは想像できないほど、きめの細かい身がしっかりと詰まっており、種もほとんどなく、調理するととろけるような食感。この「萩たまげなす」は、暑さに弱いため、収穫期間は5月中旬から7月下旬の約2ヶ月。1本の木から3~4本しか収穫できない大変貴重ななすびです。

お問い合わせはこちら →
 ・萩市農政課 TEL:0838-52-5035
 ・JAあぶらんど萩 園芸販売課 TEL:08388-2-0015

お父さんはブロッコリー、お母さんは中国野菜のサイシンである「はなっこりー」は山口県のオリジナル野菜。きれいな緑色で、ビタミンC、食物繊維に富み、花、茎、葉まで全部食べられます。味にくせがなく、どんな料理にも合います。萩市では4月頃まで収穫されます。是非旬を味わってみてください。



はなっこりー



本紙の取材にご協力いただきました上田市丸子地域の方々、ありがとうございました。

財団法人 電源地域振興センター

〒105-0013 東京都港区浜松町一丁目18番16号 住友浜松町ビル6階
TEL 03-5405-8111 (代表) URL <http://www.dengen.or.jp/>

(本冊子は再生紙を使用しています)

読者の皆様からのご意見・ご感想を反映したいと思います
アンケートにご協力をお願いします